

▶▶▶ 外国につながる子どもへの教育支援プロジェクト

外国につながる子どもの日本語支援・母語支援を通して、多文化共生の社会を目指す

▶ プロジェクトメンバー

- 長友文子（国際連携部門）
- 松下恵子（国際連携部門）
- 有馬専至（Kii-Plus）
- 西川一弘（Kii-Plus）
- 吉村旭輝（紀州経済史文化史研究所）
- 野村美雪（Kii-Plus）

○はプロジェクト代表

▶ 共創相手

- 和歌山市教育委員会
- 和歌山県国際交流協会

プロジェクトの背景

グローバル化が進むなか、各国から日本に来て暮らす外国人が増えている。それに伴い、親の事情で日本に来た子どもの数も増加している。

それら「外国につながる子ども」たちの増加によって、社会的な課題となっているのが、彼らへの教育支援、すなわち、日本語が不自由な児童生徒への日本語支援をどうするか、また母語を忘れないための母語支援をどうするか、という問題である。

和歌山でも、数は少ないが、「外国につながる子ども」たちへの教育支援が課題となっている。

和歌山大学は和歌山県で唯一の国立大学で、教育学部をもっている。また、近年、留学生も増加している。将来、教員となる日本人学生と留学生が協力すれば、日本語が不自由な子どもたちへの日本語支援、また母語を使う機会のない子どもたちとの母語交流、母語支援に、貢献することができる。

そしてまた、支援を通して、日本語と母語に挟まれた子どもたちのアイデンティティ形成や、日本人の子どもたちの多文化共生意識の成長に関わってゆくことができるだろう。

プロジェクトの目的

このプロジェクトは、大学の地域貢献の一環として、

和歌山大学の日本人学生と留学生が、「外国につながる子ども」たちの日本語支援・母語支援を行うというものである。しかし、その支援は、一方的な支援ではなく、同時に、支援する側も学び、気づくことをコンセプトにしている。こうして、プロジェクトでは、「外国につながる子どもたち」の支援からさらに伸びる、多文化共生社会の実現に向けた8つのゴールを設定している。

それを具体的に示したものが、図1である。

①「多文化共生の担い手」としての意識の育成

留学生と日本人学生が、支援活動を通して「外国につながる子ども」たちがいる問題の社会的背景を知り、多文化共生の意識を高める。

②多文化共生意識をもった教職員の育成

教員を目指している学生が、活動に参加して、文化や言葉の違う多様な子どもが共に学ぶことの意義に気づき、多文化共生の意識を高める。

③留学生のコミュニケーション関係づくり

子どもたちの母語が増えてゆくと本学の留学生だけでは対応できなくなる。本学だけでなく他の教育機関で学ぶ留学生も含めた協力体制を作って、留学生の幅広い連携を実現する。

④外国人が地域社会でよりよく生活できるための外国人と地域住民の交流の場づくり

外国につながる子どもの親と日本人の子どもとの親と

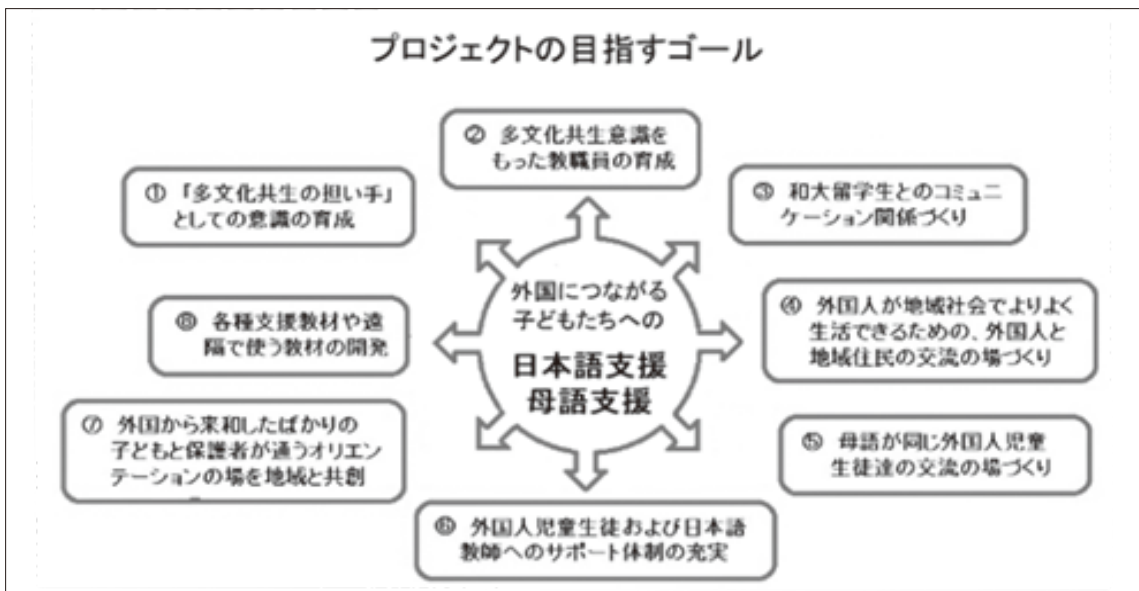


図1 日本語支援・母語支援から8つのゴールへ

が、親同士の交流を持つことで、生活する外国人と地域住民の交流につなげてゆく。

⑤母語が同じ児童・生徒たちの交流の場づくり

一人の子どもと一人の留学生の交流ではなく、多数の学校の子どもと、多数の留学生や日本人学生に参加してもらい、子ども同士のつながりを広げる場を作ってゆく。

⑥外国につながる子どもや日本語教師へのサポート体制の充実化

大学と各機関が連携し、教員向けの研修会や課題の共同検討によって、外国につながる子どもたちを抱えた教員など、支援する側を支援する体制を作ってゆく。

⑦外国から来和したばかりの子どもと保護者が通うオリエンテーションの場を地域と共創

各機関が連携し、外国から来た親子が共に日本の文化・学校制度等について学ぶ場を共創する。

⑧各種支援教材や遠隔で行う教材の開発

大学の日本語教員と日本語支援員で、和歌山の文化や特徴を生かした日本語学習テキストを開発する。

プロジェクトの活動内容

2020年度には、コロナにより、支援活動に制約があったため、次の2つの活動をスタートさせた。

(1) 留学生とのオンライン交流

和歌山市教育委員会との連携で、外国につながる子どもと留学生が交流を行った。本来であれば留学生が依頼のあった学校に行き、対面で交流を行う予定であったが、コロナの影響でオンライン交流となった。4回実施したが、2回は同じ学校の児童であった。

先ず、依頼があった学校の担当者（校長、担任教諭、日本語支援員）に子どもの状況を「事前ヒアリングシート」に記載してもらい、その情報をもとに、留学生に長友が交流内容を事前指導した。



図2 オンライン交流の様子

交流会当日は、留学生と子どもだけがzoomに参加し、関係者はzoomには入らないことを原則とした。大学では、長友と特任助教、Kii-Plusの関係者2名、学校側は、校長、担任、日本語支援員、和歌山市教育委員会の方が、その場で見守った。

交流時間は1時間。学校側に子どものご両親がいる回もあった。

交流が終わった後は、関係者に「事後ヒアリングシート」に記入してもらった。留学生には、どの様な点がやりにくかったか、準備していたことが生かされなかったことなどを聞き、反省点や気づいた点など記載してもらった。

4回の交流会では、ほとんど母語での交流となった

が、日本語を使って会話する場面もあった。子どもは最初恥ずかしがってなかなか話さないが、慣れてくると、笑顔が見られた。母語で話す生き生きとした子どもの顔が印象的であった。

印象深かったのは、留学生からの、こういうコメントである。「母語で話をしたが、年齢相当の母語が話せていない。一方、日本語は、同じ年齢の日本の子どもが話す日本語からはかけ離れすぎている。日本語も母語も、どちらも年齢以下のレベルのように感じた」。このコメントに、「外国につながる子ども」がいま直面している、そして将来背負うことになる、大きな問題が表れている。

日本で生活し学ぶ児童生徒に対して、学校や親が「とにかく日本語ができるように」と願う思いは理解できるが、それと同時に、母語を学ぶ機会も欲しい。外国につながる子どもが少ない地域で、母語を学びつつ、日本語も身につけることの大切さと難しさを改めて感じた。

留学生には、外国人が増加した背景と、外国につながる子ども支援の重要性についても事前学習を行っている。オンライン交流には、コロナ禍でも交流が可能になるというメリットがある一方で、音声不明瞭でないという問題や、その場の雰囲気がわからないといった問題がある。問題点を改善して、今後もこの活動を続けてゆきたい。

(2) 留学生と日本人学生による防災ハンドブックの作成

留学生と日本人学生が、『こどものための やさしい日本語 [防災ハンドブック]』と『留学生と日本人学生の やさしい日本語 [防災ハンドブック]』を作成した。



図3 作業時の様子

参加した日本人学生と留学生各2名が、半年間をかけて、対面での打ち合わせ、メールやzoomによる意見交換を行い、3月に完成させた。

ハンドブック作成にあたり、学生たちに、まず、「やさしい日本語」について説明し、「やさしい日本語」で書かれた他府県のパンフレットなどを参考に学んでもらった。内容を分かりやすく説明しようとすればするほど、説明文が難しくなるといったことが多々あり、その度にみんなで話し合いを重ね、外国人だけではなく誰が見ても分かる「やさしい日本語」による防災ハンドブック作成を目指した。

また、読むだけでなく、見るだけでも楽しくなり、いつも手元に置いておきたいような冊子にしたいという思いで、学生たち手作りのイラストや挿絵を入れた。

なお、防災に関する専門用語や表現などは、本学災害科学・レジリエンス共創センターの専門家の方にチェックしていただいた。

この冊子は、留学生や日本人学生に配布するほか、各学校にも配布し、また、県内に住んでいる様々な外国の方々の手に渡るよう、自治体をお願いした。

プロジェクトの成果

プロジェクトはまだ始まったばかりであるが、活動の成果をあげることができた。

(1) 外国につながる子どもへの日本語と母語支援により、子どもが今困っていることや悩んでいることが引き出すことができ、それを学校や親に伝えることができた。また、留学生にとっては、日本語を学ぶのは、自分たちのように目的をもって留学している者だけではなく、自分の意志でなく日本にいる子どもがいるということを知ること、同じ母語を持つ子どもが置かれている立場、ひいては社会の問題に関心を持つことができた。そして、子どもたちの支援がいかに重要なことであるかを認識できた。

(2) 『留学生と日本人学生のやさしい日本語 [防災ハンドブック]』を作成したことで、日本人学生と留学生が、言葉や文化の壁を越え、同じ目標に向かって共に学び、多文化共生社会への意識が高まった。このパンフレットの作成と配布を通して、留学生と地域の方々との横のつながりが、今後ひろがってゆくことが期待できる。



図4 防災ハンドブックの表紙

